

留学生を対象とした「アカデミック・ライティング I」の実践報告 —レポート作成の実態に基づいた授業デザインとその評価—

A Report about the Class “Academic Writing I” for International Students: About the Class Design based on the Actual Situation of Writing Reports, and the Evaluation of the Class

松田 佳子・小島 荘一

MATSUTA Yoshiko and KOJIMA Soichi

Abstract

The number of international students at Kanazawa University is increasing every year, and the necessity of improving the international students' Japanese writing skills, especially skills in writing reports in university classes is also increasing. In this paper, the authors describe the outline of the class “Academic Writing I” during three years, from Spring Semester 2014 to Autumn Semester 2016. In this class, a questionnaire survey is carried out among the international students every semester, to reveal their actual situation of writing reports. The survey's result shows that the students realize their basic skills to write reports, for example, how to quote information, how to write one's opinion, how to explain some figures or graphs, have improved. But there are still other points to improve, for example how to research materials or how to use Japanese grammar correctly.

1. はじめに

近年、日本への留学生が増加している。金沢大学でも、平成 22（2010）年には 491 人だった留学生数が、平成 28（2016）年には 577 人にまで増加した。大学は今後、短期留学生も含め、2000 人という大きな目標を立てている。¹ そうした中で留学生が大学生活を円滑に進められる日本語能力を身につけることが日本語教育には求められている。留学生は、第二言語である日本語を読む・聞く・話す・書く能力を身につける必要があるが、日本語でレポートや論文を作成する必要がある留学生にとっては書く能力は大学生活において必要な能力と言える。例えば、講義やゼミ、また学会などでの発表におけるレジュメや発表資料の作成、授業で課されるレポート作成、そして論文作成など、アカデミック（学術的）な内容を日本語で書かなければならない機会が幾度もある。留学生がこうしたアカデミックな文章作成能力を身につけることは、単位取得や研究業績に大きく関わることである。よって、大学においてもアカデミックな場面で役立つ日本語文章作成能力を身につける授業の提供は必要である。このような背景から、本学の留学生センターではアカデミック・ライティング I とアカデミック・ライティング II を開講している。

本稿では本学における留学生のレポート作成の実態を報告し、それに基づいたアカデミック・ライティング I の授業デザインについて述べる。そして、授業の目的と内容を報告し、その成果をまとめたい。また、毎学期末に実施している質問紙調査と自己評価票の結果を分析し、今後の課題について考察する。

2. レポート作成の実態調査

本章では、レポート作成の実態を把握するために行った調査について述べる。

2013 年度春学期から 2014 年度春学期まで授業の目標設定と指導内容の検討は、留学生のためのレポート作成教材（アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2002）、二通・佐藤（2002））を参考に行っていた。しかし、扱っている内容が実際のレポート作成に役立っているかどうか不明であった。つまり、授業のデザインは、本学の留学生のレポート作成の実態を踏まえたものではなく、担当教員がレポート作成に役立つであろうと思われる項目を経験則で取捨選択していた。しかし、実際のレポート作成に役立つ授業をデザインするにはまず、「何を」扱えばいいのかを検討する必要があると思うようになった。そこで、留学生のレポート作成に関する実態調査を行い、どのような課題のレポートを書いているのかを把握することにした。

2-1. 目的

目的は、本学で学ぶ留学生が日本語および日本語以外の科目でどのようなレポート課題に取り組んでいるかを明らかにし、レポート作成に必要な力を検討することであった。

2-2. 方法

調査対象者は、アカデミック・ライティング I と上級文法を受講している留学生計 48 名であった。アカデミック・ライティング I の他に上級文法を受講している留学生を選んだのは、上級日本語学習者が日本語でのレポート課題を課されることが多いと予想したためである。調査は 2014 年 7 月 28 日に実施し、質問紙を配布した。質問紙に書くよう求めた項目は、主に次の 3 点である。(1) 名前と連絡先メールアドレス、(2) 所属、(3) 今学期 (2014 年 4 月～7 月) 受講した科目のうち、日本語でレポートを書くことが求められた授業名とその担当教員名、さらにレポートの内容、枚数・字数、教員からの注意事項の 3 点である。配布した質問紙は、資料 1 に示す。

2-3. 結果

2-3-1. 回収率と有効回答数

留学生 48 名に依頼し、31 名から回答があった。回収率は 62.5% であった。このうち、有効回答は 24 名で、無回答 6 名、無効回答 1 名であった。無効回答となったのは、アカデ

ミック・ライティングⅠ以外のレポートについて書くよう指示していたが、アカデミック・ライティングⅠのレポートについてしか書いていなかったものである。

2-3-2. 回答者の属性

有効回答 24 名のうち人文系が 23 名、理工系が 1 名であった。よって、今回の調査結果は主に人文系に所属する留学生の実態を反映したものである。所属別に見ると、短期プログラム生が 17 名で最も多く、次いで学類生が 5 名（うち 1 年生が 3 名、2 年生が 1 名、4 年生が 1 名）、大学院生（修士 2 年）1 名、研究生 1 名であった。

2-3-3. レポートの種類

質問紙に記載された異なり授業数は、27 であった。これらの授業のレポート内容を分類するために、高崎(2010)のレポートの分類を使用した。高崎(2010)では、レポートを(A)報告するタイプと(B)論証型のタイプに分類し、さらに以下のように分類している。

(A) 報告するタイプ

- ・ブックレポート…「読んで報告」するもの。「課題として読むべき本が設定されるレポート」で「指定書を“学術的に”読み解くことが求められる」もの。
- ・報告レポート…「調べて報告」するもの。「観察や実験などの経過および結果を客観的に正確に記述することが求められる」もの。「自分の意見や主観はあまり入れず、観察や実験を経て得たデータの作成・整理を目的」とする。

(B) 論証型のタイプ

- ・課題レポート…「課題あり」。「学生の授業内容の理解の程度を教員が把握するために、授業内容に即した課題が出され」る。
- ・研究レポート…「課題なし」。「卒業論文や論文に直結するもので、自分のオリジナルな考えや発見、あるいは必要な資料の入手など、何かしら独自の材料が必要」となるもの。

今回収集したレポートの内容を高崎(2010)に従って分類した結果を表 1 に示す。今回の調査では、課題レポートを課した授業が 22 と最も多く、次いでブックレポートを課している授業が 5 であった。報告レポートと研究レポートは 0 であった。その他の 1 はレポートの種類が不明で分類できなかったものである。なお、ブックレポートは、授業内容に即した課題であり課題レポートにも含まれると思われるが、課題レポートの中でも「何かを読んでその内容を中心として書くことが求められるもの」をブックレポートとし、課題レポートと区別した。

表 1. レポートの内容の分類

レポートの種類	レポート数
課題レポート	22
ブックレポート	5
報告レポート	0
研究レポート	0
その他	1
授業合計数	28

2-4. 考察

次に、今回の調査で得られた課題レポートとブックレポートの内容の一例を示しながら各レポートの作成時に必要な力について述べる。

2-4-1. 課題レポートの作成に求められる力

今回の調査で得られた課題レポートの内容の一例を表 2 に示す。

表 2. 課題レポートの内容の一例

	授業名	レポートの内容
1	初学者ゼミ	自分の故郷の紹介
2	分子生命情報学	iPS 細胞と ES 細胞の共通点と相違点
3	現代日本の社会と文化	授業で紹介した日本の文化と社会について自分の国のことと比較する。共通点と相違点について書く。
4	現代アートとデザイン	今期の授業を通して考えたこと・感想などを書く。
5	日本語の文字の特性	書記言語と音声言語の違いから考えたことを書く。
6	大学・社会生活論	自分の地域創造力を上げるためには、どうすべきかについて書く。
7	フーリエ解析	中国電力の人たちのプレゼンテーションを聞いて、感想をレポートに書く。

課題レポートの内容を見ると、与えられたテーマに関する説明のみを書くもの（表 2 の 1, 2, 3）と、説明と自分の感想や考えを書くもの（表 2 の 4～7）に分けられる。また、テーマとなるキーワードが提示されているものもあれば、授業で扱った内容から自由にテーマを選択させる課題もある。以上のことから、課題レポート作成のために必要と思われる力として以下の 3 点が挙げられる。

- (1) テーマに関する情報を過不足なく入れて説明する力
- (2) テーマに関連した自分の感想と考えを適切に表現する力

(3) 授業で学んだ内容から自分の論じたい観点を見出す力

また、課題レポート作成時には教員から指定された枚数あるいは字数と注意事項も守る必要がある。教員からの注意事項の例としては、「参考文献を明記すること」、「参考文献を引用する場合は、引用のルールを守って書く」、「論拠をきちんと示すこと」、「共通点と相違点が明確にわかるように書くこと」、「大学生らしいレポート」等があった。これらの記述から課題レポート作成のためには、下記の 5 点も必要な力であると考えた。

(4) 指定された枚数あるいは字数内にまとめる力

(5) テーマに関連のある文献を見つける力

(6) 文献からテーマに関連のある文章を見つけ、適切に引用する力

(7) 文献からテーマに関連のある図表を見つけ、適切に説明する力

(8) 参考文献を正確に記載する力

2-4-2. ブックレポートの作成に求められる能力

今回の調査で得られたブックレポートの内容の一例を表 3 に示す。

表 3. ブックレポートの内容の一例

	授業名	レポートの内容
1	上級読解	教科書の内容について自分の感想や経験を述べる。自分の考えや疑問に思ったことを述べる。
2	留学生のための日本文学	今期の授業で読んだ文学作品の一つについて考えたこと・感想を書く。
3	初学者ゼミ	教科書の内容をまとめる。
4	人権論	新聞記事を選び、人権の視点で述べる。
5	地球環境と持続可能な社会づくり	今期の参考図書を読んだあとの感想を書く。
6	日本の近代文学	今期の授業で読んだ文学作品の都市の描き方について書く。

ブックレポートでは、教科書や参考図書あるいは新聞記事の内容について自分の感想や考えを書くことが求められていた。これらの内容から、ブックレポート作成のために必要と思われる力として以下の 4 点が考えられる。

(1) 文章の内容を正しく読み、理解する力

(2) 文章の中でレポート作成のために必要な内容を選ぶ力

(3) 文章を適切に引用する力

(4) 文章内容について自分の感想や意見をもち、それを適切に表現する力

また、課題レポート同様に教員からの指示に従う必要もあることから、前頁に記した(4)～(8)の力も求められる。

3. 授業概要

2章の実態調査の結果を踏まえ、アカデミック・ライティングⅠの授業デザインを検討した。授業デザインでは、「課題遂行型」を柱とし、実態調査で多かった「課題レポート」と「ブックレポート」が書けるようになることを目指した。開講後、この授業を受講したいという留学生の履修希望者は次第に増加してきており、現在は毎学期2クラスが開講されている。本章では授業の具体的な中身について扱うが、2クラスとも基本的には同じスケジュールで1学期間の課程が進められている。ここでは「目的」「内容」「評価方法」の3点からみていきたい。

3-1. 授業の目的

授業の目的は以下の8点であった。

- (1) 日本語のレポートで使われる基本的な表現を身につけ、レポートの形式を使って正確に書くことができるようになる。
- (2) テーマに合った適切な資料を探することができるようになる。
- (3) レポートで使われる基本的な語彙・表現・文法を身に付け、正確に書くことができるようになる。
- (4) 本や新聞などの文章を適切に引用し、自分の考えと理由を書くことができるようになる（レポート1）。
- (5) 資料（図表など）の内容を適切に説明することができるようになる（レポート2）。
- (6) 自分の考えについて説得力のある記述を書くことができるようになる（レポート3）。
- (7) 適切なコメントシートを書くことができるようになる。
- (8) レジюмеに情報を適切にまとめることができるようになる。

授業を通して3つのレポートを書くことで、実態調査によって判明したレポートを書くために必要な力を身につけることを目的としている。また、目的の(7)と(8)は、コメントシート（講義を聞いた後に書く感想票、出席票）の作成とレジюмеの作成でレポートに関するものではない。しかし、コメントシートは大学の多くの講義で提出を課されるものであり、出席チェックとして書かせる授業も多い。またレジюмеも講義やゼミで書く場合がある。しかし、留学生はなかなかその書き方を学ぶ機会がなく、書き方を知りたいという要望が多かったことから、アカデミック・ライティングⅠの授業で扱っている。²

3-2. 内容

アカデミック・ライティングⅠは1学期間にわたり、全16回で開講される。クォーター制に基づく履修はできない。参考として、資料2に2016年度秋学期の1学期間にわたる授業の流れを示しておく。

1 学期間の授業は基本的に3回のレポートを中心に進められる。各レポートは「1、テーマの紹介」「2、テーマに関する話し合い、レポートに必要な表現練習」「3、各学生のメモ作成（各自の取り上げたい観点の設定）」「4、1回目の提出」「5、返却とフィードバック」「6、2回目の提出」「7、評価と最終フィードバック」という流れで展開する。学生は基礎的な知識を学びながら、各レポートのテーマについて自分なりの興味のある観点を見つけ出し、それを、メモなどを作成しながら学生同士、あるいは教師との話し合いによって深化させていく。

基本的に授業の時間は話し合い（質疑応答）や表現練習の場であり、文章の作成は各学生が授業以外の時間を使って行わなければならない。各レポートの1回目の提出は評価の対象ではなく（提出点としては成績に影響する）、教師はこれを添削し、問題点などのアドバイスを行ったうえで2回目の提出を求める。この2回目の提出レポートが評価の対象となるため、学生はレポート3つを通して計6回、レポート提出をしなければならない。なお、各レポートに必要な表現練習としては、アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）や友松（2008）などを使用した。

3-2-1. レポート1

レポート1では新聞記事をテーマとした課題レポートの練習が行われた。使用する新聞記事は夏野剛「多様性が若者を強くした」（2013.4.14 朝日新聞 be on Saturday に掲載）で、学生は記事の内容を把握し、それに対する自分の考えとその理由を書くことを練習した。その他の参考資料、引用文献を用いることも可能だが、この段階ではそれは必須ではなかった。まずは新聞記事の必要な箇所を適切に引用すること、そして同意と反論の表現を適切に使って書けるようになることを大きな目標としていたためである。

また、日本語のレポートの書式も身につけるため、レポートの簡単な書式も示した上で書かせた。ここで大きな目標として設定されていることは、まずは日本語のレポートの形に慣れることと基本的な表現パターンを身につけることであった。そのため、レポートを書く上での基礎となる表現練習として「硬い表現の書き方」、「引用文の書き方」、「同意や反論の書き方」、「助動詞の使い方1」、「接続詞の使い方1」を学習した。

3-2-2. レポート2

続くレポート2では「最近、売れているもの／売れていないもの」をテーマに、図表などの資料を提示して、その内容を適切に説明する練習が行われた。レポート2では、担当教員が「中国におけるTOTOのトイレの売り上げ」をテーマとしてレポート例を示し、レポートの基本的な流れが理解しやすくなるよう工夫した。これは報告レポートの学習であるが、学生は図表の説明だけではなく、その図表に見られる数値の変化（売り上げ）の要因についても自ら分析し、他の資料を引用して述べることが求められる。そのため、表現練

習として「図表の提示方法」、「定義や分類の書き方」、「変化を形容する表現」、「接続詞の使い方 2」を学習した。

なお、他のレポートとは異なり、このレポート 2 ではテーマとなる図表を学生に自由に選ばせた。学生は各自が興味のあるものを選べるが、それが適切なものであるかどうかは授業の中で担当教員がチェックし、不適切なものである場合には選び直しをさせた。また、学生が信頼性のある資料を探せるようになるために、授業ではインターネットから信頼性のある資料を探す練習も取り入れた。

3-2-3. レポート 3

最後のレポート 3 は課題レポートであるが、レポート 1 と 2 で学んできたことを応用し、テーマとなる新聞記事や社説について自分の考えとその理由を説得力をもって述べることが求められた。2016 年度春学期から使用されているテーマは朝日新聞に掲載された朝井リョウ『若い世代こう思う 「部活って？」』(2016. 6. 11) と日本経済新聞に掲載された「社説 世界有数の観光大国になるために」(2016. 4. 30) である。レポート 3 ではレポート 1 とは異なり、考えと理由を書くだけではなく、内容に説得力を持たせるために考えと理由をサポートする客観的な資料を各学生が自ら探し、引用する必要があった。表現練習としては、「列挙の表現方法」、「結論の提示の仕方」を学習した。

なお、レポート 3 でもレポート 1 のように簡単な書式を示しているが、章立て等の詳しい内容は学生に考えさせた。これは 1 学期間の最後の課題として、学生に自分の力でレポートを構成する力を身につけてもらうことをねらいとしたためである。よってレポート 3 はレポート 1 や 2 と比べると、自分自身で考える要素が多くなり、難易度が高いものであった。

3-3. 評価方法

アカデミック・ライティング I では、以下の基準によって、評価を行った。

- (1) レポートの評価点 : 60% (レポート 1 : 15%、レポート 2 : 20%、レポート 3 : 25%)
- (2) 平常点 (その他の課題類の提出点) : 30%
- (3) 出席点 : 10%

各レポートはルーブリック方式によって評価され、レポート 1 と 3 は 16 点満点、レポート 2 は 14 点満点で評価されたものを学期末にそれぞれの配点割合に応じて点数変換した。評価項目は「内容」、「正確さ」、「表現」、「形式」に大別され、それぞれ「レポートの内容が目的に合っており、説得力のあるものになっているか」、「日本語が正確に書け、意味が分かるか」、「レポートに相応しい表現が使えているか」、「レポートの形式に合った書き方ができているか」を基準として、各レポートのテーマに合わせて細かな配点を設定した。レポートの「内容」と「正確さ」についてはそれぞれ 5 点満点 (レポート 2 で

は 4 点満点)、「表現」と「形式」については 3 点満点とした。参考として、資料 3 に 2016 年度秋学期のレポート 1 の評価票を示す。

4. 質問紙調査と自己評価の結果

アカデミック・ライティング I では毎学期末に受講生に対して質問紙調査を実施しており、授業の内容、特に課題のテーマに対する興味の度合いや難易度、日本語力の向上に役立ったかについて学生の意見を収集している。また、初回と最終回の授業で自己評価票を記入させ、1 学期間を通じての成長と達成度を自己評価させている。本章では、質問紙調査の結果と自己評価の内容に基づき、授業の成果と今後の課題について考えてみたい。

4-1. 質問紙調査

学期末の質問紙調査では主として実施した 3 回のレポートについて、学生に「難易度はどうだったか」、「日本語力向上に役立ったか」、「興味は持てたか」の各項目について、5 段階評価で回答してもらった。

それぞれの項目における学生の 5 段階評価の平均値を示したものが以下の表 4 である。平均値は小数点以下第 3 位を四捨五入したものであり、5 段階評価では 5 が最大値（難しかった、役立った、興味を持てた）、1 が最小値（簡単だった、役に立たなかった、興味を持てなかった）となっている。データは 2015 年度春学期から 2016 年度秋学期までの 4 学期間、合計 8 クラス分を集計している（2015 年度春学期：24 人、2015 年度秋学期：29 人、2016 年度春学期：19 人、2016 年度秋学期 28 人、合計 100 人）。

表 4. 質問紙調査の結果

	難易度	日本語力の向上に役立った	興味
レポート 1	3.05	4.29	3.61
レポート 2	3.21	4.40	3.86
レポート 3	3.57	4.49	3.72

この結果からみて分かることは、レポートの難易度については多くの学生が「ちょうどいい」と感じていることだ。ただ、レポート 3 については少し難しく感じた学生もいたようだが、これは学期末の総まとめのような位置付けであるため、そうした評価になることも止むを得ないであろう。

日本語力の向上に役立ったか、という質問について見ると、どの項目もかなり高評価を得ており、学生にとってレポート作成能力の向上を実感できる内容になっているものと思われる。また、表 4 には載せていないが、レポートに役立つ表現練習を扱った学習に関する質問では 4.50 という高い数値が出ている。日本語の文章を書くための基本的な文法の練

習、レポート作成に必要な表現の学習がアカデミックな日本語文章作成能力の育成には重要な要素であることを示していると言えよう。

興味を持てたかどうかについては、いずれのレポートも 3.7 前後でやや興味を持てたような結果となっている。その中でもレポート 2 は、先述したように図表を提示して、その内容を正確に説明する能力を学習するのが目的であるが、他の 2 つのレポートとは違い、テーマにする図表は各学生が自由に選ぶことができた。よって、初めからテーマが決められているレポート 1 や 3 とは異なり、学生は自分の興味のあるものを自由に選べるというおもしろさがあり、それが評価の若干の差に出ている可能性がある。

以上をまとめると、3 回のレポートの難易度については、ちょうどいいと考えている学生が多いことが分かった。ただし、レポート 3 に関してはやや難しいと感じている学生もいることから、レポートを作成するまでのサポートの仕方に工夫が必要である。ただ、全体的に興味もある程度持っており、日本語力の向上に役立ったとする回答も多かったことから、授業で扱っている内容はこれからレポートを書き始める「日本語のレポート初心者」にとっては、レポートの基礎固めとしてちょうどよく、適切なものになっていると思われる。

4-2. 自己評価

初回と最終回の授業で学生に記入してもらう自己評価票については、主に以下の項目により実施されている。これらの項目について、学生には 4 段階で自分の力を自己評価してもらった。

- (1) 日本語のレポートの形式を使って書くことができる。
- (2) 日本語の語彙、表現、文法を正しく使って書くことができる。
- (3) テーマに合った適切な資料を探すことができる。
- (4) 本や新聞などの文章を正しくレポートに引用することができる。
- (5) 図表を適切に説明することができる。
- (6) 自分の考えと理由をわかりやすく書くことができる。

以下に、この自己評価の結果（各項目への自己評価が、学期の始めと終わりでどのくらい変化したか）を表 5 に示す。自己評価は 4 段階で 4 を最大値（できる）、1 を最小値（できない）として初回の授業時と最終回の授業時に評価させたが、表中の「変化なし」は自己評価の数値に変化がなかった人数、「1 段階上昇」は 1 から 2 へ、2 から 3 へなど、自己評価の数値が 1 段階上昇した人数、同様に「2 段階上昇」は 2 段階、「3 段階上昇」は 3 段階上昇した人数を表している。集計したのは 2015 年度秋学期から 2016 年度秋学期までの 3 学期間、合計 5 クラス分である（2015 年度秋学期：14 人、2016 年度春学期：19 人、2016 年度秋学期 25 人、合計 58 人）。

表 5. 自己評価票の数値の変化

	変化なし	一段階上昇	二段階上昇	三段階上昇
(1) レポートの形式	3	27	22	6
割合 (%)	5.17	46.55	37.93	10.34
(2) 語彙・文法・表現	22	33	2	1
割合 (%)	37.93	56.90	3.45	1.72
(3) 適切な資料の探し方	11	31	12	4
割合 (%)	18.97	53.45	20.69	6.90
(4) 正しい引用方法	4	26	23	5
割合 (%)	6.90	44.83	39.66	8.62
(5) 図表の説明	4	28	22	4
割合 (%)	6.90	48.28	37.93	6.90
(6) 自分の考えと理由を 分かりやすく書く	9	25	8	2
割合 (%)	20.45	56.82	18.18	4.54

注 1： 割合は小数点以下第三位を四捨五入しているため、合計は 100%にはならない。

注 2： 表中の「自分の考えと理由を分かりやすく書く」の項目については、2015 年度秋学期の自己評価票には設定されていなかった項目であるため、2016 年度のみを集計（44 人分）である。

まず、この結果を見て分かることは、多くの学生がレポートを書くために必要な基本的な能力が向上したと自己評価していることであり、特にこの授業の目的に照らし合わせてみれば、「レポートの形式」、「正しい引用方法」、「図表の説明」の項目は、いずれも 90%以上の学生ができるようになったと実感していることが分かる。1 学期間に 3 回のレポートを書かせ、レポートの基本的な形式と引用、図表の説明を繰り返し練習することで、学生にこれらの基礎が着実に身についていることが提出されるレポートからも明らかであるが、学生自身もそのことを実感できていることを示しているものと言えよう。

次に、学生の自己評価の伸びがそれほど見られなかった項目について述べる。「語彙・文法・表現」に関しては、「変化なし」と自己評価している学生が 4 割近くおり、これは全項目中で最も多い。この中には「1 から 1 へ」、「2 から 2 へ」と低い自己評価のままの学生も見られる。また、自己評価票に記入する各自の今後の目標にも、日本語の語彙・文法・表現を使って正確に書けるようになることを課題として挙げる学生が毎学期、数名いることから、日本語の正確な文章作成能力の育成については、現在扱っている表現練習の内容や方法では十分とは言えないことが窺える。そのため、今後、学生が少しでも正確に文章が書けるようになったことを実感できるような練習を検討する必要がある。

また、「適切な資料の探し方」については 2 割弱の学生が「変化なし」と自己評価しており、授業の中で練習時間が十分に確保できていないことが反映された結果と言える。³ 実

際にはレポート2において、担当教員が「中国における TOTO のトイレの売り上げ」のレポート例を示す際に、学生にそれに合った図表を探させたり、レポート例に載せてある図表がどこから引用されたものであるかを紹介したりする。また、インターネットで検索する際にどのようなキーワードを用いればよいか、またインターネット上のどのような資料が信頼性が高いものなのかを解説するが、1回の練習では各自がテーマに合った信頼性のある資料を探すには十分な練習とは言えないだろう。実際に学生が自らのテーマとして選んできた図表に不適切なものがあつたり、レポート3において適切な資料を探すことができない学生がいたりした。適切な資料の収集は、実態調査でも分かったようにレポート作成において必要な能力であることから、今後、いかにして適切な資料の探し方を身につける練習をするかが課題であると言える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、留学生のレポート作成の実態調査の結果とその結果に基づいた授業実践、そして、その評価について述べた。質問紙調査と自己評価票の結果から、アカデミック・ライティング I ではこれから日本語でレポートや論文を書こうとしている留学生にとって、基礎的な力が身につけられるような授業が提供できていることが分かった。しかし、日本語の正確さと適切な資料の収集については、学生の自己評価の伸びがあまり見られなかったことから、今後、この2点について学生自身が伸びを実感できるような練習を検討する必要がある。また、実際にアカデミック・ライティング I を受講した学生が他の科目のレポート作成時に授業で学んだことがいかに役立ったかは検証できていない。自己評価はあくまでも自己評価であり、実際に書かれたレポートの完成度や成績との関連性を調査していかなければ、本当に授業を通して学生に基礎的な力が身についたのかを明らかにすることはできない。この点について、留学生が他の授業で実際に提出したレポートを見せてもらいながらインタビューを実施するといったさらなる調査が必要である。これは今後の課題としたい。

【注】

1. 金沢大学はスーパーグローバル (SGU) 創成支援事業の一環として、平成 36 年度には全学生に占める留学生の割合を 20% (約 2,200 人) とする目標を立てている。

『平成 26 年度スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」構想調書【タイプ B】』<http://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/concept/sgu_chousho_b05.pdf>
(閲覧日: 2017 年 2 月 18 日)

2. 2016 年度秋学期に関しては、レジュメは授業では扱わなかった。16 回の授業ではレジュメ作成のための十分な指導時間を取ることが困難となっており、学生へのアンケートなどに基づいて優先順位を考慮した結果、扱うことを取りやめた。

3. ただし、「変化なし」と評価した学生は「3 から 3 へ」が 8 人、「4 から 4 へ」が 3 人であり、いずれも最初から「資料の探し方」には「できる」という自己評価をしていた学生である。

【参考文献】

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2002）『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』アルク
- 朝井リョウ（2016. 6. 11）『若い世代こう思う 「部活って？」』『朝日新聞 オピニオン 2』14 面
- 「社説 世界有数の観光大国になるために」（2016. 4. 30 朝刊）『日本経済新聞』
- 高崎みどり編著（2010）『大学生のための「論文」執筆の手引 卒論・レポート・演習発表の乗り切り方』秀和システム, p. 20
- 友松悦子（2008）『小論文への 12 のステップ』スリーエーネットワーク
- 夏野剛（2013. 4. 14 朝刊）「夏野剛の逆説進化論 多様性が若者を強くした」『朝日新聞 be on Saturday』
- 二通信子・佐藤不二子（2002）『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

<資料 1>レポート作成の実態調査に使用した質問紙

平成 26 年 7 月 28 日

日本語のレポート作成に関する調査へのご協力をお願い

私たちは、留学生センター総合日本語プログラムで開講している留学生を対象としたレポート・論文の書き方を学ぶクラス（アカデミックライティング 1、2）の授業内容や指導方法の改善、教材作成のための基礎研究として、日本語および日本語以外の科目で、留学生のみなさんが実際にどのようなレポート課題に取り組んでいるかを調べています。よろしければ以下の調査にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。ご提供いただいた個人に関する情報および回答内容については、厳重に管理し、これらを授業改善のための研究と教材作成以外の目的には使用しないことをお約束します。

この調査について何か不明な点等ありましたら、下記にご連絡ください。

金沢大学留学生センター 深川美帆・松田佳子
E メール：yoshikomatsuta81@gmail.com（松田）

●以下の①～④についてお答えください。

①名前： _____

連絡先メールアドレス： _____

②所属：a. プログラム A（KUSEP）

b. プログラム B（日研生）

c. プログラム C（一般短期）

d. プログラム D（セメスター）

e. その他の短期留学プログラム

（プログラ名： _____）： _____ 年

f. 大学院生： _____ 研究科 _____ 専攻・コース

{修士・博士} _____ 年

g. 研究生： _____ 研究科 _____ 専攻・コース

{修士・博士}

h. 特別聴講学生

i. その他 _____

③あなたが今学期（2014年4月～7月）受講した科目のうち、日本語でレポートを書くことが求められた授業名とその担当教員名、さらに、レポートの内容、枚数、注意事項を例のように書いてください。今学期書く（あるいは書いた）レポートすべてについて書いてください。ただし、アカデミック・ライティングⅠとⅡで書いたものについては書かなくていいです。忘れてしまったことは、「忘れた」と書いてください。

番号	授業名	担当教員	レポートの内容	枚数・字数	教員からの注意事項
例	日本事情	山田太郎	今期の授業を通して考えたことを書く。	A4で1枚 1000字	参考文献を引用する場合は、引用のルールを守って書く
1					
2					
3					
4					
5					

④③であなたが書いた（あるいは、これから書く）レポートを、後日、調査のために提供／見せていただくことは可能ですか。以下の a, b, c から選んでください。

- a. 調査のために今学期書いたレポートをすべて提供しても／見せてもいい
- b. 調査のために今学期書いたレポートの一部を提供しても／見せてもいい
→提供してもいいと思うレポートの番号を書いてください _____
- c. レポートを提供したく／見せたくない

※ a、b と回答していただいた方には、改めてご連絡いたします。

ご協力ありがとうございました。

<資料 2>2016 年度秋学期のスケジュール

回	主題	内容
1	はじめに	ガイダンス・レポートの基礎知識 表現練習「教科書 2 課、作文の基本（硬い表現）」
2	レポート 1	テーマ記事についての話し合い 表現練習「助動詞 1」
3	レポート 1	記事の内容確認、表現練習「教科書課、引用」
4	レポート 1	レポート 1 のメモの確認、話し合い 表現練習「教科書 12 課、同意と反論」
5	コメントシート	コメントシートについて解説 コメントシートを書いてみる
6	レポート 1	レポート 1 返却、フィードバック 表現練習「接続詞 1」
7	レポート 2	レポート 2 の例、表現練習「教科書 5 課、定義と分類」
8	レポート 1、2	レポート 1 の読み合い、フィードバック 表現練習「教科書 6 課、図表の提示」
9	レポート 2	テーマに関する話し合い 表現練習「教科書 7 課、変化の形容」
10	レポート 2	表現練習「接続詞 2」
11	レポート 2	レポート 2 返却、フィードバック（表現の復習）
12	レポート 2、3	レポート 2 の読み合い、フィードバック レポート 3 メモの確認、話し合い
13	レポート 3	表現練習「教科書 10 課、列挙」
14	レポート 3	レポート 3 返却、フィードバック、表現練習
15	レポート 3	レポート 3 書き直しの読み合い 表現練習「教科書 14 課、結論の提示」
16	レポート 3 （まとめ）	レポート 3 の読み合い、フィードバック 学習の振り返り（質問紙・自己評価票の記入）

<資料 3>2016 年度秋学期レポート 1 の評価票

	内容	正確さ		表現	形式
5	自分の立場とその理由が分かりやすい。独自性がある。疑問点がない。	正確で、意味がよくわかる。意味不明な箇所がない。	3	引用や同意／反論、硬い表現をほぼ適切に使っている。	タイトル、名前、見出しがある。タイトルを見出しは太字になっている。適切に段落を作っている。
4	自分の立場とその理由が分かりやすい。疑問点がない。	一部正確ではないが、おおむね意味が分かる。意味不明な箇所がない。	2	一部、引用や同意／反論、硬い表現を使っていないが、おおむね適切に使っている。	1 つ不足している点があるが、他はできている。
3	自分の立場とその理由の一部が分かりにくい。一部疑問点がある。	あまり正確ではないが、なんとか意味は分かる。一部、意味不明な箇所がある。	1	引用や同意／反論、硬い表現を適切に使っていない点が目立つ。	1 つ以上不足している点があるが、一部できている。
2	自分の立場とその理由に分かりにくいところがある。いくつか疑問点がある。	正確ではなく、誤りが目立つ。意味不明な箇所がいくつかある。	0	引用や同意／反論、硬い表現を全く使っていない。	タイトル、名前、見出しがない。適切に段落を作っていない。
1	自分の立場とその理由に分かりにくいところが多い。いくつか疑問点がある。	正確ではなく、誤りがかなり目立つ。意味不明な箇所がいくつかある。			
0	自分の立場とその理由がしっかり書かれておらず、説明不足。疑問点ばかり。	不正確で意味が全く分からない箇所がほとんどである。			